

ヘキュバの表象と“the mobled queen”

大 芝 香 織

「福岡女学院大学短期大学部英語英文学紀要」第六十号抜刷

2024（令和6）年3月

ヘキュバの表象と“the mobled queen”

大 芝 香 織

1. 序論

ウィリアム・シェイクスピアの『ハムレット』¹の2幕2場では、巡業にやってきた役者たちが城へとやってくる。城へとやってきた役者たちを歓迎したハムレットは、役者の一人に“Come, give us a taste of your quality. Come, a passionate speech.”(2.2.368-70)と言って早速、余興を求める。“What speech, my good lord?”(2.2.371)と問う役者にハムレットは自分が聞きたい語りについて具体的に伝えるのが以下の台詞である。

“One speech in’t I chiefly loved-’twas Aeneas’ talk to Dido, and thereabout of it especially when he speaks of Priam’s slaughter.”(2.2.383-85) と言い“ If it live in your memory begin at this line- let me see, let me see-”(2.2.385-87)と自らの記憶たどる。この台詞のあと、ハムレットが語りだすのは、トロイア陥落の物語の一部である。ハムレットが冒頭を、残りを役者の一人が語る。聞き役となるのは、ポローニアスとローゼンクランツとギルデスターンである。

劇中でハムレットと役者が語るのは、トロイア陥落の際のプリアモス王の死をアイネアースが語る場面である。その語りのクライマックスとなるのが、トロイア王プリアモスの妻、ヘキュバの登場場面である。ヘキュバを語る役者が涙を流したことによりポローニアスは語りをやめるように頼む。ハムレットはその後、独白で“What’s Hecuba to him, or he to her,/That he should weep for her? What would he do/Had he the motive and that for passion/That I have?”(2.2.494-97)と自問する。トロイア王プリアモスの死よりも注目されるヘキュバとは何者なのであろうか。

本稿では、オウィディウス、ウェルギリウス、エウリピデス、セネカの作品を通してヘキュバという人物の表象を考察し、シェイクスピアの『ハムレット』で語られるヘキュバとの表象の違いを指摘する。また、シェイクスピアが『ハムレット』のプリアモス王の死の場面を描く際に、参考にしたと考えられているクリストファー・マーローの『カルタゴの女王ディドーの悲劇』で描かれるヘキュバの特徴を考察する。これらの作品におけるヘキュバの表象を通して、『ハムレット』のヘキュバの表現描写におけるシェイクスピアの独自性について論じる。

2. ヘキュバとは何者なのか。

ヘキュバが描かれている主要な作品は、ウェルギリウスの『アエネーイス』の第2巻、オウィディウスの『変身物語』の第13巻、セネカの劇作『トロイアの女たち』、エウリピデスの劇作『ヘキュバ』である。

上記の作品の中でヘキュバは、多産の象徴、そして、子どもを失って嘆き悲しむ母親、そして、復讐を遂げる母親として描かれている。ヘキュバはトロイアのプリアモス王の妻である。『アエネーイス』では娘と息子が50人ずつおり、娘と嫁の合計が100人であるという記載があることから、ヘキュバは多産の象徴であったと考えられる。ただし、生んだ子供たち全員をトロイアの陥落によって失うことになる。『アエネーイス』の第2巻で描かれるのは、トロイアの陥落、プリアモス王の死の瞬間である。しかし、ピュロスにプリアモス王が殺される直前に、王とヘキュバの目の前で息子が殺される。一方、『変身物語』と『ヘキュバ』で描かれるのはトロイア陥落後に、ヘキュバに降りかかる、さらなる不幸である。それは、唯一生き残った娘がアキレスの生贄として殺されたこと、そして、戦争を逃れるために秘かに国外へ逃がし、トラキア王のもとで養育されていた末息子を金に目がくらんだトラキア王によって殺されたことである。ヘキュバはトラキア王に復讐をする。金に強欲なトラキア王を騙し、洞窟へとおびき寄せさせる。そこでトロイアの女たちの加勢を得て、ヘキュバはトラキア王の目玉を抉り取り、復讐を遂げる。『変身

物語』では、その後、ヘキュバは彼女を恐れたトロキアの民に石を投げられる。そして、犬へと変身してしまう。エウリピデスの『ヘキュバ』で描かれるヘキュバの復讐は、より残酷である。トラキア王の目の前で、トラキアの子を殺害し、その後、王の目玉を抉り取る。『ヘキュバ』では、ヘキュバは犬に変身しないまま幕を閉じている。

セネカの『トロイアの女たち』では、ヘキュバはアキレスの生贄として娘を亡くす悲劇の母親として描かれている。しかし、その後に彼女の身に起こるトラキア王による息子の殺害も、ヘキュバがトラキア王に復讐する場面も劇中では描かれていない。

このように作品によってヘキュバの描写には差異があるが、ヘキュバは多産の象徴であり、子を失って嘆き悲しむ母親、そして復讐を遂げる母親として描かれる。

シェイクスピアが『ハムレット』の作中で引用した箇所は、『アエネーイス』の第2巻でプリアモス王がピュロスに殺害される場面である。『アエネーイス』の第2巻においてヘキュバの出番はさほど、多くない。ヘキュバは目の前で息子を殺された母親、また、夫の殺害の目撃者である。

『アエネーイス』では、老王であるプリアモス王は、ピュロスに反撃しようと武装する。しかしヘキュバが武装した夫に、戦わず、祭壇で祈りを捧げて神の助けを求めるよう説き伏せる。ピュロスはプリアモス王を探しながらも、プリアモス王の息子を追い詰める。息子が命からがら両親の目の前にたどり着いたとき、息を引き取る。目の前で息子を失ったプリアモス王は、怒りでピュロスに立ち向かっていく。しかし、老齢ゆえに、力でも勝てず、ピュロスに祭壇で殺害される。この場面において、ヘキュバの行動や様子などについての描写はない。ただし、ヘキュバはプリアモス王と同じ場所におり、王が殺害される瞬間を見ているだろう。

セネカの『トロイアの女たち』で描かれるヘキュバは独白でプリアモス王の死について詳細に語っている。

私は見た。あってはならぬ呪わしい王の殺害、

であろうことか、祭壇でなされた、罪と言うにはあまりの大罪を。
 アエアクスの血を引くあの男は、戦に猛り狂い、掴む手酷く、
 髪の毛ねじ上げて王の頭を反り返らせると、
 傷口深く非道の剣を埋め込んだ。
 奥まで刺し貫いた剣を勝ち誇って抜き取ると、
 手元に戻った剣には老王の喉の血の滴りしたたがなかった。
 これほどに酷たらしい殺害を思いとどまれぬ者があっただろうか。
 人生も最後の敷居を跨ごうかという老年であるのに、
 天上の神々が罪業をご照覧あるのに、いかほどかの厳かさが
 王国の倒壊にはあるものなのに。(104)

このプリアモス王の死の場面は、『アエネーイス』の内容とほぼ、一致しているが、『アエネーイス』でのプリアモス王は老齢であることが強調されている。「老齢に震えるプリアムスを無理やり高壇のところへ引っ張っていきました。王の足は息子の血で滑りました。」(52) 息子を目の前で殺され、その息子の血で自らの足を滑らせたという点は、『アエネーイス』の方が、より残酷さを増す描写となっている。

セネカではヘキュバの独白でピュロスによる王の殺害が語られるが『アエネーイス』とマーローの『カルタゴの女王ディドーの悲劇』(以下『ディドー』)では、もう一人の目撃者であるアイネイアースが語っている。

Oxford版の『ハムレット』の注釈においては、ハムレットと役者が語るプリアモス王の死は、マーローの『ディドー』の影響が強く表れていると指摘されている(227)。また、ジョナサン・ベイトも『ハムレット』での役者が語る同じ場面は、シェイクスピアがマーローの『ディドー』を模倣しているように思える、あるいは、少なくとも、間接的にはのめかしていると述べている(39)。

『ディドー』でアイネイアースが語るプリアモス王の死の場面に出てくるヘキュバには、新たな一面がある。夫を愛する妻として描写され、恐怖が狂気へと変わり、ピュロスに立ち向かう姿があるのだ。

アイネイアースはプリアモス王を殺すピュロスが城についた場面を以下のように語る。

“At last came *Pirrhus* fell and full of ire,/His harness dropping bloud, and on his speare/The mangled head of *Priams* yongest sonne,” (2.1.213-15) ピュロスの剣には、プリアモス王の末息子の頭部が刺さっている。そして、ピュロスがプリアモス王を見つけた場面についての語り続ける。

So I escapt the furious *Pirrhus* wrath:
 Who then ran to the pallace of the King,
 And at *Joves* Altar finding *Priamus*,
 About whose withered necke hung *Hecuba*,
 Foulding his hand in hers, and joyntly both
 Beating their breasts and falling on the ground,
 He with his faulchions poynt raisde up at once,
 And with *Megeras* eyes stared in their face,
 Threatning a thousand deaths at every glaunce. (2.1.223-31)

上記の台詞によりプリアモス王が祭壇で見つけられたとき、ヘキュバは王の首にしがみつき、二人は手を取り合っていたことがわかる。おそらく、プリアモス王を見つけたピュロスの剣には、末息子の頭部があり、プリアモス王もヘキュバもそれを目にしている。

To whom the aged King thus trembling spoke:
Achilles sonne, remember what I was,
 Father of fiftie sonnes, but they are slaine,
 Lord of my fortune, but my fortunes turnd,
 King of this Citie, but my *Troy* is fired,
 And now am neither father, Lord, nor King:
 Yet who so wretched but desires to live?

O let me live, great *Neoptolemus*.
 Not mov'd at all, but smiling at his teares,
 This butcher whilst his hands were yet held up,
 Treading upon his breast, strooke off his hands. (2.1.232-42)

ヘキュバの目の前で、夫であるプリアモス王の両手がピュロスによって切断される。ヘキュバはピュロスの顔に飛びかかり、爪で彼の脛にのしかかる。“At which the franticke Queene leapt on his face,/And in his eyelids hanging by the nayles,/A little while prolong'd her husbands life:”(2.1.244-46) しかし、ヘキュバは兵士たちに取り押さえられ、叫び声をあげる。“At last the souldiers puld her by the heeles,/And swong her howling in the emptie ayre,”(2.1.247-48) 妻の叫びを聞いた夫は、両手がないことも忘れて、ピュロスに反撃を試みようとする。“Which sent an eccho to the wounded King:/Whereat he lifted up his bedred lims,/And would have grappeld with *Achilles* sonne,/Forgetting both his want of strength and hands,”(2.1.249-52) しかし、プリアモス王はピュロスに敗れて、命を落とす。

マーローの『ディドー』で語られるヘキュバは夫の死の目撃者であるだけでなく、襲撃者に立ち向かった妻である。ヘキュバはピュロスの剣にささった息子の首を、そして、目の前で夫の両手が切り落るのを目にしている。『ディドー』のヘキュバは恐怖心が狂気へと変化し、ピュロスに殺された息子、そして両腕を切り落とされた夫への復讐を試みた妻なのではないだろうか。ベイトはヘキュバがピュロスの顔に飛び掛かかり、爪で彼の脛にのしかかる場面は、アーサー・ゴールディングが英訳した『変身物語』の第13巻での記述を模倣したものであると述べている。トラキア王に息子を殺されたヘキュバが王へ復讐する際の行動である“Did in the traytors face bestowe her nayles,”(line 673)をマーローが『ディドー』で対象をピュロスに変えて模倣したと説明している(39)。ゴールディングの英訳した『変身物語』の第13巻にあるヘキュバのトラキア王に対する行動は、末息子を殺された悲しみが復讐心へと変わったことに起因する。マーローのヘキュバは、恐怖心

が狂気へと変わり、狂気が復讐心へと変わったのではないだろうか。ヘキュバは両手を切断された夫のために襲撃者に対して復讐を試みた妻である。また、夫とともにピュロスに立ち向かった妻でもある。

マーローの『デイドー』では、ヘキュバとプリアモス王の夫婦仲が強調されている。カルタゴにあるプリアモス王の像を見つけたアエネイアースとアカーテースの会話では、アカーテースが“O where is *Hecuba*? /Here she was wont to sit,”(2.1.12-13)と言い、プリアモス王の横にヘキュバの像がないことを嘆く。さらに、カルタゴの女王デイドーの御前でトロイアの陥落を嘆く際に、アエネイアースは“O *Priamus*, O *Troy*, Oh *Hecuba*!”(2.1.105)と嘆くのである。ヘキュバとプリアモス王が一心同体であったかのような印象を与えている。

以上のことから、マーローの『デイドー』のヘキュバは、『アエネーイス』とも異なり、『トロイアスの女たち』や『変身物語』、『ヘキュバ』とも異なっている。しかし、マーローは、ギリシャ神話やギリシャ悲劇で描かれる従来のヘキュバの表象を作品の中で受け継いでいる。プリアモス王が「息子が50人いたが、全員殺された」とピュロスに話すことで、間接的に、ヘキュバが多産な母親、そして、子を亡くした悲劇の母親であることを表現している。また、目の前でプリアモス王が殺害されることから、王の殺人の目撃者である。しかし、『変身物語』と『ヘキュバ』とは異なり、殺された子のために、復讐を遂げる母親ではなく、殺された子と目の前で両手を切断された夫のために復讐を試みる妻、さらに、ピュロスへ夫とともに立ち向かう姿が描かれる。また、トロイアの妃、プリアモス王の妻というヘキュバの立場が、故郷を失ったアエネイアースとアカーテースの会話によって強調されている。これらは、マーローの『デイドー』のヘキュバが持つ独自の特徴であろう。

マーローの『デイドー』をシェイクスピアが知っていたのであれば、トロイア王の妃であったヘキュバという人物の多産な母親、悲劇の母親、復讐を遂げる母親、そして、夫を亡くし嘆き悲しむ妻という多面性に自らの独自性を加えていた可能性は高いのではないだろうか。

3. ハムレットのヘキュバ

前述したようにヘキュバは多産な母親、悲劇の母親、復讐を遂げる母親、トロイアの妃、プリアモス王の妻という表象を持つ人物である。しかし、ハムレットの2幕2場で語られるプリアモス王の死の場面で語られるヘキュバはマーローの『デイドー』で語られた夫にすぎり、手を取り合う妻でも、夫を襲う襲撃者に立ち向かう妻でもない。役者が語るヘキュバの姿は夫の死の瞬間の目撃者でもなく、逃げ惑う弱き女性である。

ハムレットが語り始めるプリアモス王の死の場面は以下の通りである。

The rugged Pyrrhus, he whose sable arms,
 Black as his purpose, did the night resemble
 When he lay couched in th'ominous horse,
 Hath now this dread and black complexion smeared
 With heraldry more dismal, head to foot.
 Now is he total gules, horridly tricked
 With blood of fathers, mothers, daughters, sons,
 Baked and impasted with the parching streets
 That lend a tyrannous and a damned light
 To their lord's murder; roasted in wrath and fire,
 And thus o'ersized with coagulate gore,
 With eyes like carbuncles, the hellish Pyrrhus
 Old grandsire Priam seeks. (2.2.390-402)

『アエネーイス』においては、ピュロスの恐ろしさは、プリアモス王の息子を追い詰め、両親の目の前で息子を死なせる残忍さと祭壇での王の殺人という非道徳性に重点が置かれる。また、マーローの『デイドー』では、ピュロスが剣に、末息子の首を刺していること、両手を挙げて命乞いをする王の両手を切り落とす彼の残酷さが強調される。一方でハムレットの語るピュロス

役者が語る老王プリアモスへ迫るピュロスは、若さが強調されている。老王を見つけるとすぐに駆け寄り、剣を振り上げるが、そこで静止する。彼の動作において静と動が強調されるが、静止するピュロスの描写が一層、彼の残忍さを強調するような印象を受ける。ピュロスもプリアモス王も何も言葉を発することなく、ただ、ピュロスの動作が語られる。言葉を発さないままプリアモス王はピュロスに殺される。ピュロスに悪態をつく『アエネーイス』のプリアモス王や命乞いをする『デイドー』のプリアモス王とは異なる。また、『アエネーイス』や『トロイアの女たち』の独白でヘキュバが語るプリアモス王の死の場面とは異なり、プリアモス王が祭壇で殺されたという語りもない。役者が語るヘキュバはプリアモス王の死の瞬間を目撃した人物でもない。

ヘキュバが役者の語りで登場するのは、ハムレットが“Say on, come to Hecuba.”(2.2.439)と続きを促したあとである。“But who-ah woe-had seen the mobled queen-”(2.2.440)と役者はヘキュバを“the mobled queen”(「頭を覆った妃」)と称する。

1 PLAYER. - Run barefoot up and down, threatening the flames

With bisson rheum, a clout upon that head
 Where late the diadem stood and, for a robe,
 About her lank and all-o'erteemed loins,
 A blanket in the alarm of fear caught up.
 Who this had seen, with tongue in venom steeped,
 'Gainst Fortune's state would treason have pronounced.
 But if the gods themselves did see her then,
 When she saw Pyrrhus make malicious sport
 In mincing with his sword her husband limbs,
 The instant burst of clamour that she made
 (Unless things mortal move them not at all)
 Would have made milch the burning eyes of heaven

And passion in the gods. (2.2.443-456)

役者が語るヘキュバは“the mobled queen”、“her lank and all-o’erteemed loins”（「彼女の細く、たくさんの子を産みし腰」）という表現により、プリアモス王の妃であり、多産の象徴である従来のヘキュバの表象を引き継いでいる。しかしながら、彼女は炎に脅えながら裸足で逃げ惑い、頭を布で覆い、恐怖の中で掴んだブランケットで腰を布で覆っている。また、ヘキュバが目にした光景は、夫であるプリアモス王がピュロスに殺される瞬間ではなく、プリアモス王の殺害後にピュロスが遺体の手足を切り刻んでいる様である。ヘキュバは悲鳴を上げる。ピュロスのトロイアの民への無差別殺人、プリアモス王の殺害、殺害後に遺体の手足を切り刻む残虐行為、燃えるトロイアの市内と城内、ハムレットのヘキュバはこれらすべての恐怖に対する体現者として語られている。

『ハムレット』で語られるピュロスの描写には、『アエネーイス』やマーローの『デイドー』で語られるピュロスとは異なり、彼らの息子を殺した描写もないことから、従来のヘキュバの代表的な表象である、子を亡くして嘆く母親という表現描写が見当たらないように見える。『ハムレット』で語られるヘキュバの特徴は、“the mobled queen”という表現である。ヘキュバを“the mobled queen”と表現することに、シェイクスピアは何を意図しているのだろうか。

3. “the mobled queen”としてのヘキュバ

役者がヘキュバについて語るのは、ピュロスがプリアモス王を殺害する場面を語った後である。役者の長い語りに対して、ポローニアスは“This is too long.”(2.2.436)と不満を漏らす。彼の不満に対して、ハムレットは“It shall to the barber’s with your beard. Prithee say on – he’s for a jig, or a tale of bawdry, or he sleeps. Say on, come to Hecuba.”(2.2.437-39)と述べる。そして、役者がヘキュバを“the mobled queen”(2.2.440)と称して語りを再開

すると、ハムレットは、“the mobled queen!”(2.2.441)とヘキュバの新たな名称を繰り返す。ポローニウスは、“That’s good.”(2.2.442)という感想を述べる。ポローニアスのこの感想については、Arden 版でも Oxford 版の注釈においても、“the mobled queen”という表現が珍しいからであると説明されている²。

しかし、役者の長い語りに対して、「長すぎる」と不満を漏らすポローニウスについてハムレットは彼がジグ（ダンス）や卑猥な話のためにいるのだと彼の不満の原因について説明している。その直後に、ポローニウスが“the mobled queen”という表現を褒めたのであれば、“the mobled queen”という語にはポローニウスが卑猥な話を期待するような意味があるのではないか。

フィリッパ・ベリーは、“the mobled queen” “all-o’erteemed loins”という表現は凌辱された人を暗示していると述べている。中世、ルネサンス文学において、そのような人物の容姿は、しばしば、布で覆われる、あるいはベールで顔を隠されているという (61)。ポローニウスが“the mobled queen”と聞いて、凌辱された妃の話が聞けると思ったのであれば、ハムレットが述べた通り、卑猥な話を期待したのではないだろうか。

シェイクスピアの『ハムレット』のヘキュバを考察するとき、シェイクスピアの詩作『ルクリースの凌辱』（以下『ルクリース』）にも同じ場面のトロイアの陥落、そして、プリアモス王の遺体を見つめるヘキュバの描写があることに注目すべきである。メアリー・ジョー・キーツマンはヘキュバの描写がある両作品の類似性は継続するプロジェクトの一つの部分であると述べている (42)。

『ハムレット』と『ルクリース』で描写されるヘキュバが一つの継続した作品であるのであれば、シェイクスピアが描くヘキュバは凌辱された女性として描いていると考えることができる。バイトはルクリースが語るヘキュバは凌辱された女性であることが前提されていると述べている (81)。タークインから凌辱を受けたルクリースは、朝になり、タークインが我に返り、館を去った後、トロイアの陥落を描いた絵画に目を留める。彼女は、その絵画の中で様々な苦しみを見るが、ヘキュバに関心を抱く。ヘキュバは血を流

すプリアモス王の傷がピュロスの足に踏みつけられているのを見ている。ルクリースはヘキュバに心を寄せている。そして、トロイアに木馬を招き入れたシノーンに目を留める。しかし、バイトが指摘するように、ルクリースの心の内では、シノーンの顔は自分を凌辱したタークインの顔へと変化していく。彼女は、シノーンとタークインを同じ裏切り者として彼にタークインの表象を与えている (79)。

'It cannot be', quoth she, 'that so much guile-
 She would have said 'can lurk in such a look',
 But Tarquin's shape came in her mind the while,
 And from her tongue 'can lurk 'from 'cannot' took. (lines 1534-37)

ルクリースはトロイアの陥落と自分が受けた凌辱を同等のものとして並列している。タークインとシノーンが同一視されている。

'For even as subtle Sinon here is painted,
 So sober-sad, so weary, and so mild
 (As if with grief or travail he had fainted)
 To me came Tarquin armèd to beguile
 With outward honesty, but yet defiled
 With inward vice: as Priam him did cherish
 So did I Tarquin; so my Troy did perish. (lines 1541-57)

バイトはルクリースの言葉の術は、男性読者にルクリースの苦しみに重ねて、シノーンがヘキュバの女性の空間に侵入したものとして見せていると述べている (81)。

『ハムレット』で“the mobled queen”と称されるヘキュバは『ルクリース』においても凌辱された女性であることが暗示されている。シェイクスピアは、従来のヘキュバの表象に新たに凌辱された女性という表象を与えたこと

になる。

しかし、シェイクスピアは、この“the mobled queen”という表現に、もう一つのヘキュバの表象を与えているのではないだろうか。それは、やはり、子を殺されたことを嘆く母親の姿である。シェイクスピアはエウリピデスの劇作である『ヘキュバ』を基に、子を殺され、悲嘆に暮れる母親であるヘキュバを表している。

エウリピデスの『ヘキュバ』には、衣服で頭を覆うヘキュバが登場する。アキレスの生贄として、唯一生き残った娘ポリュクセネーが選ばれたことを知ったヘキュバはギリシャ人に娘の命乞いをする。ヘキュバは娘に“I am already dead before my death, killed by my misfortunes.”(439)³と言って娘を奪われる母親の悲しみを訴える。しかし、トロイアの姫として生きてきた娘は、ギリシャ人の奴隷として生きるよりも死を選び、母親の元から去る。ヘキュバは“Ah, ah! I am faint! My limbs are unstrung! Daughter, take hold of your mother, stretch out your hand, give it to me, do not leave me childless!”(439)と娘に抵抗をするように、そして、子を失う母親の悲しみを訴える。ヘキュバの訴えは娘には届かず、彼女は母親の元を去ってしまう。ヘキュバは *Hecuba lies on the ground and covers her head with her garments.*(439)とト書きにあるように頭を衣服で覆いながら娘を亡くすことを嘆き悲しむ。さらにその姿はタルテュビオスの台詞とコーラス・リーダーとの会話により、娘を殺されたヘキュバの姿として観客に印象づけられる。

TALTHYBIUS. Trojan women, where might I find Hecuba, once
queen of Ilium?

CHORUS LEADER. She lies before you, Talthybius, upon the ground,
wrapped in her garments. (443)

エウリピデスの『ヘキュバ』の中で頭部を衣服で覆い悲嘆に暮れるヘキュバを“the mobled queen”と表現していたのであれば、『ハムレット』のヘ

キュバの表象にも子を亡くして嘆く母親の姿が暗示されていることになる。『アエネーイス』第2巻では、プリアモス王が殺されるまでに、ヘキュバは子供たちが殺されている。そして、そのうちの一人は目の前で息を引き取っている。『ハムレット』で語られるヘキュバには、一見、子を亡くした母親の表象がないように見えるが、エウリピデスのヘキュバが頭を衣服で覆う姿を“the mobled queen”と表現しているのではないだろうか。『ハムレット』の中で役者は、逃げ惑うヘキュバの姿について“a clout upon that head / Where late the diadem stood…”(2.2.444-45)と述べている。“The mobled queen!”とハムレットが繰り返した3行後にこの語りがある。ヘキュバのこの姿はエウリピデスのヘキュバの悲嘆する姿を思い起こさせる。したがって、“the mobled queen”は、凌辱された女性、そして、子を亡くして嘆く母親の姿の両方の意味が暗示されていることになる。

シェイクスピアの『ハムレット』のヘキュバは“the mobled queen”である。凌辱された女性、子を失って嘆く母、多産の象徴、夫を殺害された妻、そして、ピュロスの襲撃の恐怖の体現者である。シェイクスピアは、従来のヘキュバの表象を受け継ぎつつ、ヘキュバに凌辱された女性という新たな表象を与えている。これがシェイクスピアの独自性なのではないだろうか。また、『ルクリース』においても『ハムレット』においても、語られるヘキュバの姿は、夫が殺害されたのちの姿である。『ルクリース』ではピュロスはプリアモス王の傷の上を踏みつけ、『ハムレット』では王の遺体を切り刻んでいる。これは、ピュロスの残忍性だけでなく、ヘキュバが目にした恐怖を、そして彼女が体感した恐怖心を強調している。『アエネーイス』にないこれらの点は、シェイクスピアのオリジナルである。

シェイクスピアはエウリピデスの『ヘキュバ』を知っていたのだろうか。最後にこの点について考察したい。シェイクスピアはオウィディウスの『変身物語』は知っていたと考えられている。アーサー・ゴールディングが英訳した『変身物語』の第13巻に、ヘキュバの記述がある。ベイトはシェイクスピアのグラマースクールでの身につけた教養に関しては、十分な教養があったと主張する。その根拠となるのは、オウィディウスの、『祭歴』が彼

の死後まで英訳されていないにもかかわらず、『祭歴』を基にして『ルクリース』を書いているからである(13)。また、ラテン語の原文も読むことができ、種本として使用していたと述べている(8)。しかしながら、バイトはシェイクスピアがエウリピデスのヘキュバを知っていたことについては懐疑的である(239)。

一方でタニア・ポランドは、エウリピデスの作品がラテン語に訳されていたことを指摘し、シェイクスピアがエウリピデスを知っていたと考えている。初期近代において、ヘキュバはギリシャ悲劇の確立した象徴であった。エウリピデスの『ヘキュバ』は印刷されたギリシャ劇でも、翻訳されたものでも、上演されたものでも16世紀のヨーロッパでは最も人気があった論じている(1064)。確かにラテン語に訳されているのであれば、オウィディウスの原文を読んでいたシェイクスピアがエウリピデスを読まないのは不自然であるのではないだろうか。また、読んでいたかったとしても、エウリピデスがヨーロッパで上演されていたのであれば、娘を亡くしたヘキュバが頭を覆い、地面に倒れこむ姿は観客にとって、印象に残る場面であったに違いない。

劇中でハムレットは、“for the play, I remember pleased not the million, 'twas caviare to the general.”(2.2.373-75)と自分と役者がこれから語るトロイアの陥落の物語が大衆受けのしない、高尚なものであると言っている。つまり、子を亡くした母親としてのヘキュバの表象が簡単にはわからない、エウリピデスの『ヘキュバ』を知らないで“the mobled queen”の意味が理解できないからではないだろうか。

4. 結論

ヘキュバは悲劇の母親、妻、そしてトロイアの妃である。子供を多く生んでいるため、多産の象徴でもあり、トロイアの陥落の際には、多くの息子たちを殺され、夫を目の前で殺される。ギリシャ人の奴隷と身分を落としたあとにも、生き残った娘をアキレスの生贄とされ、国外へ逃がしていた息子も

裏切りにより、殺害される。子を殺害した王に復讐する母親である。マーローはヘキュバを『アエネーイス』や『変身物語』のよりも夫への愛情深い妻として書いている。

マーローの『デイドー』を参考に『ハムレット』の2幕2場での役者の語りを書いたと考えられているシェイクスピアは、マーローのヘキュバよりもピュロスの残忍さを強調する点を参考にしたのであろう。マーローのピュロスは、プリアモス王の両腕を切り落とし、とどめの一撃を与えている。プリアモス王の血を旗に浸して通りへと出る。シェイクスピアはマーローのピュロスが両手を切り落としたことをヒントに、プリアムス王の遺体を切り刻むピュロスを描いたのではないだろうか。老王の遺体を切り刻むピュロスには狂気に満ちた残忍さがある。マーローのヘキュバは王を助けようと自らの爪でピュロスに立ち向かうが、シェイクスピアのヘキュバは、叫び声をあげるのみである。しかし、シェイクスピアは“the mobled queen”とヘキュバを称し、ヘキュバの逃げ惑う様子を描写する中で、彼女の従来 of 表象である子を亡くした悲劇の母親、夫を殺害された妻、多産の象徴、ピュロスの残忍な行為の目撃者であること、それらの全てを表現している。そして、凌辱されたであろう妃という新たな表象を与えた。

本稿では、ヘキュバの従来 of 表象を考察し、『ハムレット』の2幕2場で役者が語る“the mobled queen”と称されるヘキュバに込められたシェイクスピア独自の表象について論じた。

注

- ¹ 本稿における『ハムレット』の引用はすべて Arden 版 (Revised Edition) による。
² Arden 版については、pp.301 の注釈を参照。Oxford 版については、pp.230 を参照。
³ Euripides の “Hecuba” の引用箇所についてはページ数を記載している。

引用文献

- Bate, Jonathan. *Shakespeare and Ovid*. Oxford UP, 1993.
- Berry, Phillipa. *Shakespeare's Feminine Endings: Disfiguring death in the tragedies*. Routledge, 1999.
- Euripides. “Hecuba”, *Euripides: Children of Heracles, Hippolytus, Andromache, Hecuba*. edited and translated by David Kovacs, Harvard UP, pp.393-519.
- Kietzman, Mary Jo. “What Is Hecuba to Him or [S]he to Hecuba? Lucrece’s Complaint and Shakespearean Poetic Agency”, *Modern Philology*, Aug.,1999, vol.97, no.1, pp. 21-45. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/439033
- Marlowe, Christopher. “The Tragedie of Dido, Queene of Carhtage”, *The Complete Works of Christopher Marlowe*, edited by Fredson Bowers, 2nd ed., vol.1, Cambridge UP, 1981, pp.6-64.
- Ovid. “The Thirteenth Booke of *Ovids Metamorphosis*”, *Shakespeare's Ovid, being Arthur Goldings Translation of the Metamorphosis*. edited by W.H.D.Rouse, Centaur Press, 1961, pp.252-74.
- Pollard, Tanya. “What’s Hecuba to Shakespeare?” *Renaissance Quarterly*, vol. 65, no. 4, 2012, pp.1060-93. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/10.1086/669345
- Shakespeare, William. *Hamlet: The Arden Shakespeare Revised Edition*, edited by Ann Thompson and Neil Taylor, Bloomsbury Publishing Plc, 2016.
- . *Hamlet: The Oxford Shakespeare(Oxford World’s Classics)*. edited by G.R.Hibbard, Oxford UP,1998.
- . “Lucrece”, *The Oxford Shakespeare Complete Sonnets and Poems*, edited by Colin Burrow, Oxford U P, 2002, pp.239-338.
- ウェルギリウス. 『アエネーイス』 杉本正俊訳、新評論、2018年。
- オウィディウス. 『変身物語 (下)』 中村善也訳、岩波書店、2005年。
- セネカ. 「トロイアの女たち」、高橋宏幸訳、『悲劇集 1』、京都大学学術出版会、2013年、pp.99-184.